

彦根市埋蔵文化財調査報告第16集

# 葛籠南遺跡

—団体営ほ場整備事業に伴なう—

昭和63年3月

彦根市教育委員会

## 序

彦根市は、琵琶湖東岸の中央部に位置する「城と湖のまち」であります。城は言うまでもなく国宝彦根城でございますが、これは長年にわたる先人達の努力で形成されてきた本市の誇る豊富な歴史のシンボルと言えましょう。また、母なる琵琶湖は私達の生活に欠くことのできない自然そのものであり、両者は彦根市の心の景観としてかけがえのないものであると同時に、豊かな人間性を育てる上で欠かすことのできない文化遺産であり生活源でございます。

こうした中で当市教育委員会では各種の調査を進めてまいりました。本報告書は、団体営ほ場整備事業に伴なって実施した葛籠南遺跡発掘調査の結果をまとめたものであります。本書が彦根市を理解するための手がかりになれば幸であります。また、私達の心の中の風景がさらに豊かなものになるための一助になればと望むものであります。

最後になりましたが、この調査にご理解を賜り多大なご協力をいただきました河瀬土地改良区や地元の方々をはじめ関係各位に対し厚くお礼を申し上げます。

昭和63年3月

彦根市教育委員会

教育長 河 原 保 男

## 例　　言

1. 本書は、彦根市葛籠町に所在する葛籠南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、河瀬地土改良区の団体営ほ場整備事業に先だち、文化庁・滋賀県の補助金を受けて実施した昭和62年度市内遺跡調査事業である。
3. 本調査の事務局は次のとおりである。

彦根市教育委員会社会教育課

課　　長　　安沢　進

課長補佐兼庶務係長　尾本　吉史

文化財係長　国定　信夫

4. 現地調査および整理、報告は社会教育課技師 本田修平が担当した。

5. 現地調査および整理、報告等の作業は次の構成で実施した。

調査作業員 原　　弥助・辻森 敏雄・若林善五郎・中尾 芳雄・西村　薰  
出口加寿夫・茶木佐一郎・鈴木 千代・亀岡 よし・若林 佳子  
大堤須美子・吉田 秋子・古川 久・出口美代子・疋田千鶴子  
寺村きみ子・松林 愛子

整理作業員 伏木 和子　　　　　　　以上 敬称略

6. 本調査で出土した遺物および資料は当教育委員会が保管している。

## 目 次

序

例言

1.はじめに	1
2.位置と環境	2
3.調査の結果	3
4.まとめ	8
5.出土遺物観察表	10

## 図 版 目 次

図版1 調査地点と周辺の遺跡	17
図版2 トレンチ配置図	18
図版3~4 遺構図	19
図版5~8 出土遺物実測図	21
図版9~11 出土遺物写真	25
図版12~17 遺構写真	28

## 1. はじめに

河瀬地区土地改良区による葛籠町地域のほ場整備事業は、本年度から工事が開始されたものであるが、計画面積58ヘクタールに及ぶもので、最終昭和66年の完工をめざす事業である。この計画地域の中には、南川瀬南遺跡・葛籠南遺跡・法士南遺跡の3遺跡が所在しており、遺跡の取り扱いについては昭和61年度に施工主体である河瀬地区土地改良区と当市教育委員会で協議し、着工以前に発掘調査を実施することとし、昭和61年度事業として南川瀬南遺跡が所在する旧中山道以北の地域を発掘調査した。本年度の調査は、冬期施工のもので、地域的には葛籠南遺跡の所在するところにあたる。このため、調査は稲刈りが終わるのをまって昭和62年11月24日から実施し、昭和63年2月22日をもって現地調査を終了した。

## 2. 位置と環境

葛籠南遺跡の所在する葛籠町は旧中山道に沿って広がる集落であり、国道8号線とJR東海道新幹線にはさまれた交通の要地である。

この旧中山道は、宇曽川・犬上川・芹川の間は、地形が比較的安定した扇状地扇端部を通っており、古代の街道である東山道とかさなっているものと考えられる。

犬上川に沿った地域は、その歴史が少なくとも縄文時代後期までたどることができる。犬上川右岸の福満遺跡では、縄文時代後期平安時代に至る遺物が出土しているが、遺跡がその期間連続していたわけではなく各時代で断続しており、犬上川の影響が強かったことがうかがわれる。犬上川左岸でも縄文時代晚期の遺物は確認できており、昨年発掘調査を実施した南川瀬南遺跡ではその包含層をごく一部ではあるが調査した。弥生時代前期の遺跡はまだ確認できていないが、中期以降になると右岸では福満遺跡、竹ヶ鼻廃寺等で後期の遺物が出土しており、左岸では馬場遺跡が中期の集落跡であり、堀南遺跡では後期の方形周溝墓を3基検出しており、この他横地遺跡でも遺物が出土している。古墳時代の右岸の様相は、竹鼻廃寺・福満遺跡等の集落跡および品井戸遺跡で確認できた方形周溝墓1基が確認できており、左岸では横地遺跡で集落跡および後期群集墳、堀南遺跡で住居跡、葛籠北遺跡では後期群集墳を確認している。このように、この地域は古墳時代になるとかなり開発が進み遺跡の内容もかなり多彩なものになることが知られる。特に左岸での後期群集墳は、地上での痕跡がない地域で削平されて周溝だけを残したもので、今後も調査の進展とともに調査例が増えるものと考えられ、かなりの勢力が成長していた事とが考えられる。このことは、奈良時代に右岸で竹ヶ鼻廃寺が造営されが造営されていた事でもうかがえるし、左岸では甲良町の長畑遺跡で整然と建物等が配置された有力氏族の居宅跡か地方官衛といわれる遺構が検出されており、また葛籠北遺跡でも集落跡が確認されている。このことから安定した地形で開発が進み各所に集落が形成されていたことがうかがえる。

以上のように犬上川流域の旧中山道を中心とする地域は、交通の要所という人文地理的な環境とあいまって彦根市内においても注目される地域の1つであるといえる。

### 3. 調査の結果

葛籠南遺跡は、葛籠町と出町の間で旧中山道より上に広がる農地に須恵器等遺物の散布地が広がっているもので、県教育委員会が発掘調査を実施している甲良町の長畠遺跡の北側にあたる。また、遺跡は散布地で遺跡範囲等は不明であったため、排水路予定地に3m×3mの試掘トレンチを重機で設定し、その範囲を明確にすることを第一の目標とした。試掘トレンチで包含層遺構等が確認できた場合は、そのトレンチを中心に拡張もしくはトレンチの増設をして可能なかぎり遺跡の性格を明らかにすることとして発掘調査の計画を立てた。調査地は、途中では場整備の残事業が生じたため、旧中山道まで広がり、合計35ヶ所のトレンチを設定した。このうち、7号支線排水路に設定した1～12トレンチまでは耕作土、床土等に若干の須恵器片等の遺物は入っているものの第3層は砂礫層や礫混り土層になり、遺構は確認できなかった。また、旧中山道側の6号支線排水路に設定した26～30トレンチも遺構等は確認できなかった。

以下、遺構が確認できた13～16トレンチを中心に各トレンチの調査結果について述べていきたい。

#### 〈13・14トレンチ〉

第6号支線排水路の葛籠町から県道栖崎・野口線へ抜ける道側に設定したトレンチで、試掘の時点で須恵器片等の遺物が出土し、溝・ピット等が検出されたため、トレンチを拡張して可能な限り面的な調査を実施した。試掘トレンチのナンバーでは13・14トレンチとなっていたが上記のとおり拡張したため、結果的には一つのトレンチとなったが、トレンチナンバーはそのまま13・14トレンチとしたものである。

土層は、耕作土が40cmほどあるが、表面から25cmほどの所で黄褐色の床土化していた。第2層は旧来からの床土で黄褐色粘質土層が約15cmあり、第3層は西側 $\frac{1}{3}$ の部分が黒灰色砂混り土になるがこの層は東側で極薄いものになる。西側はこの下が遺構面となるが、東側は第4層として茶褐色粘質土層が入り、褐黄色粘質土が地山となり遺構面になる。この遺構面に隅丸方形の最大80cmのピットを中心とするピット群・溝・焼土等が検出できた。

#### 〈15～16トレンチ〉

13・14トレンチの東側は田面が約40cmほど高くなるが、試掘時に第3層の茶褐色粘質

土層から極少量ではあるが緑釉陶器片や須恵器片等の遺物を確認したためトレンチを増設した。この地点は、第4層の褐黄色粘質土層のピット群が見られる遺構面となる。このように遺構が検出できたトレンチは西側から15T・15T・15T拡張・16T・16T拡張の計5つのトレンチである。

#### 〈20~22・31~33トレンチ〉

葛籠町から県道栖崎・野口線に至る道路の西側に伸びる予定の第8-1号支線排水路東側の地点である。土層は基本的に15~16トレンチと同様で耕作土約35cmの下で黄褐色粘質土の床土が15cmほどあり、第3層の茶褐色粘質土層が25cmあり、第4層が褐黄色粘質土層になる。この第3層には灰釉陶器片や須恵器片等の若干の遺物を包含していた。この第3層は西側に行くほど疊混りになり、22・31トレンチでは茶褐色疊混り粘質土層になる。この第3層を切り込んで中1m・深さ40cmの溝が確認でき、先ず溝を掘り込んだが、その後の清掃の過程で前述した様に、この層が包含層であることが確認できたために第3層を掘り込んだ。この溝の性格は、以前の田に関係のあるものと考えられ、出土遺物より近世を遡るものではないと考えられる。また、第4層では遺構は確認できなかつた。

以上、各トレンチの概要を記したものであるが、次にピットを中心とした遺構について記してみたい。

#### S B - 1

13・14トレンチ西端で検出した建物跡で、現状で1間×3間であるが、トレンチ北側で広がり桁行2間で梁行3間の掘立柱建物跡と考えられる。柱穴は、ほぼ径50cmの円形をなし、柱間は桁間・梁間ともに2mであり、主軸はN-73°-Wである。

#### S B - 2

S B - 1と重複しながら東側約2mの所で検出できた建物跡でS B - 1と同様現状では1間×3間の規模を持つが、トレンチ北側に広がり桁行2間で梁行3間の建物と考えられる。柱穴はS B - 1より若干大きめで60cm前後のもので、柱間は桁行・梁行ともに2mであり、主軸もS B - 1と並行しておりN-73°-Wである。ピットの検出状況でピットの切り合い等ではなく、その時期の前後は不明であるが、S B - 1とS B - 2は建物の規模や主軸が並行することより建て替えと考えられる。

### S B - 3

S B - 1、S B - 2 の南  $1\text{ m}$  の所で検出したもので、現状で 2 間  $\times$  2 間の総柱の建物跡であると考えられる。柱穴は径  $60\text{cm}$  前後のピットで、柱間は  $2.5\text{m}$  あり、主軸は N -  $6^{\circ}$  - E を計る。床面積は  $25\text{m}^2$  あり、今回の調査で確認できた、ただ 1 棟の総柱建物跡である。

### S B - 4

S B - 3 と重複し、S B - 2 と隣接して検出した建物跡で、現状で 1 間  $\times$  2 間であるがトレンチ南側に伸びるものと考えられ桁行 2 間で梁行 3 間の規模が予想される。柱穴は最大  $60\text{cm}$  であり、柱間は 2 間  $\times$  3 間の建物として桁間  $2.5\text{m}$  で梁間  $2\text{m}$  あり、主軸は N -  $57^{\circ}$  - E を計る。

### S B - 5

S B - 3、S B - 4 と 1 部重複し S B - 2 と隣接して検出したもので、現状で 2 間  $\times$  2 間のものであるが、トレンチ北側に伸びて桁行 2 間で梁行 3 間の建物が予想できる。柱穴は最大  $60\text{cm}$  を計り、柱間は桁間梁間ともに  $2\text{m}$  であり、主軸は N -  $24^{\circ}$  - E である。

### S B - 6

S B - 4 の南側に隣接して確認した建物跡で、現状では 1 間  $\times$  1 間であるが、トレンチ南側に伸びるものと予想される。柱穴は直径  $50\text{cm}$  前後の円形をなし、柱間は  $2.5\text{m}$  と  $2\text{m}$  で S B - 4 と同様の規模を持つことが考えられ、そうすると主軸は N -  $90^{\circ}$  - W になるだろう。

### S B - 7

S B - 6 の東側に隣接して確認したもので現状では 2 間  $\times$  2 間であるが、トレンチ北側に伸び桁行 2 間で梁行 3 間の建物であることが予想できる。柱穴は  $80\text{cm}$  の方形ピットを中心にしており、柱間は桁間梁間ともに  $2\text{m}$  を計り、主軸は N -  $33^{\circ}$  - E を計る。

### S B - 8

S B - 7 と重複するもので S B - 6 と隣接して検出したもので、現打で 2 間  $\times$  3 間の建物であり、トレンチ南側に伸びても建物の規模は変わらないと考えられる。柱穴は最大  $50\text{cm}$  のものであるが、他は  $30\text{cm}$  前後であり柱間は桁間  $2.5\text{m}$  で梁間は  $2\text{m}$  を計り、主軸

はN-88°Wを計り、ほぼSB-6と並行する。

### SB-9

SB-7・SB-8の東側に重複して確認できたもので、現状では1間×2間であるがトレンチ北側に伸びるものと考えられる。しかし、この建物跡は他のものと柱間が若干異なることから、その規模は不明と言わざるをえない。柱穴は最大60cmの方形ピットを中心とするもので、柱間は3mを計り、主軸はN-47°Eである。

### SB-10

SB-8の南側に接して検出したもので、現状で1間×2間の規模であるが、トレンチ南側に伸びSB-11との関連から考えれば桁行2間で梁行3間の建物跡と予想される。柱穴は最大50cmを計り、柱間は桁間梁間ともに2mであり、主軸はほぼ磁北を指している。

### SB-11

SB-10と1部重複して東側に並行する建物跡で、桁行2間で梁行3間の規模を持つものと考えられる。柱穴は50~70cmの不整形な方形をなしており、柱間は桁間梁間ともに2mで、主軸はほぼ磁北を指し、床面積は24m<sup>2</sup>と考えられる。SB-10とSB-11は同規模で同一の方向性を持っているが、ピットの切り合い等は確認できなかつたためその時期の前後関係は不明であるが、建て替えの関係にあると考えられる。

以上、13・14トレンチで検出した建物跡について述べて来たのであるが、このトレンチではこれ等のピット群より東側では溝が確認できただけである。この事から、トレンチ東側の約15mは一応建物群は除切れ、この東側の田を一段（約40cm）上った所でまたピット群が検出できた。

15'・15の各トレンチでもピットを検出しているが、トレンチが小さく各ピットの関係を把握するには至らなかった。次に15トレンチ拡張について記したい。

### SB-12

トレンチ北側で検出した建物跡で、現状で2間×2間のものであるが、トレンチ北側に伸びて桁行2間で梁行3間の建物跡が考えられる。柱穴は最大50cmを計り、柱間は桁間2mで梁間2.3mであり、主軸はN-52°Wである。この建物跡は、13・14トレンチで確認した建物群のそれと柱間等に若干の違いがあり、時期的な相異を示しているのかも

知れない。

15トレンチ拡張は東側で無遺構になり、また16トレンチでも遺構は検出できなかった。この無遺構地帯は約10mほどあり、その東側でまたピット群が検出できたが、この遺構の分布状況から見てこの地域が遺跡の東端になると考えられる。次に16トレンチ拡張の遺構の状態について記したい。

### S B - 13

16トレンチ拡張南側で確認した建物跡で、現状で1間×2間のものであるが、トレンチ西側に伸びて桁行2間で梁行2間もしくは3間の規模が考えられる。柱穴は50cm以下のピットであり、柱間は桁間梁間ともに2.5mを計り、主軸はN-63°Eである。

このトレンチから東側は地形的に田が段々に高くなるが、地山は礫が混りはじめ、褐黄色礫混り土に変わり、遺構・包含層とともに確認できなくなり、今回の調査地域での遺跡の東限になると想われる。

## 4. まとめ

今回の葛籠南遺跡発掘調査では、掘立柱建物跡を総数で13棟検出したが、ほ場整備事業の排水路予定地という限られた範囲の調査であり、前記した建物跡の他にも面的な調査を実施すればまだ増える可能性がある。この様な非常に制約された中での調査であつたため、集落全体の建物配置や集落構造まで明らかにするまでは至らなかつた。しかし、今回の調査で確認できた事を以下にまとめて葛籠南遺跡の性格を明らかにしてみたい。

葛籠町付近の地形は東から西にかけて段々に低くなつており典型的な扇状地の地形を成している。このため、地山は砂礫層から粘質土層まで各種のものがあり、遺跡は粘質土層の地域に形成されている。また、この地形はあまり安定していなかつたと考えられ、各時期継続して遺跡が形成された所は少ない。この様な地理的条件のもとに葛籠南遺跡は成立したと思われ、集落はトレンチの両側の舌状台地状の地形に広がつていたと考えられる。

遺構は、その主要なものが13・14トレンチの約40mの中に密集した形で確認できた。この様に密集した中で11棟の掘立柱建物跡が検出できたのであり、SB-3・4・5やSB-7・8・9の重複から少なくとも3時期の時間的な巾があったことが知られるが、建物跡の密集から考えれば4時期の時間巾を考えるのが妥当であるだろう。また、SB-1・2やSB-10・11の建物跡は場所を若干移動しただけの建て替えであり、集落内での建物の建設場所に制約があった事がうかがえる。

次に遺跡が継続した時期は、一応第3層が包含層になるわけであるがその遺物の出土量は極少量であり、またピット内からの遺物の出土も限られており非常に限定しにくいくが、須恵器片の他に灰釉陶器片や1点ではあるが綠釉陶器片が混っていた。この事より、ここでは一応大きく奈良時代後半から平安時代にかけての時期に形成された集落跡であるとしておきたい。

葛籠南遺跡は当初その遺物の分布状況より、甲良町の長畑遺跡と同一の遺跡になると想えていたが、今回の調査結果から考えれば別の遺跡とする事が妥当であろう。また、葛籠北遺跡でも明確な時期は不明であるが、大きくはこの時代であると考えられる掘立柱建物群を確認しており、長畑遺跡から葛籠北遺跡まで1km強の距離の中に3つの集落が存在した事になり、かなりの密度であった事がうかがわれる。この様な集落の集中は、一つの集落があまり大きくなかった事を示していると同時に、この地域の開発がかなり

進んでいた事を教えてくれる。東山道のこの地域での整備は、この様な歴史を抜きにしては考えられないものであり、今後の調査の進展によっては各集落跡相互の構造の解明からこの地域の歴史を明らかにする事も可能であると考えられる。今後は、以上の様な視点を持って調査を進めて行く必要があるだろう。

## 5. 葛籠南遺跡出土遺物観察表

番号	種類 器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
1	須恵器 甕	口径 61cm	○大型甕の口縁で、頸部より強く外弯して開き、端部を強くナデて断面三角形の口縁を作る。 ○口縁端部下に2ヶ所の弱い段を作る。 ○肩部は強く張ると思われる。	○口縁部は内外面ともに横ナデ調整であるが、口縁外面下半分にタタキ調整を加える。 ○肩部はタタキ調整で、内面に青海波文、外面に並行タタキ痕を残す。	胎土：精良 色調：青灰色 焼成：硬	13・14T SD-1 出土
2	須恵器 甕	口径 52cm	○大型甕の口縁で、口縁部は強く外傾して開き、ほぼ中央部を外側に引き出し、内面を上がり、端部をやや肥厚ぎみに作る。 ○中央部外面に2条の波状文をほどこす。	○内外面ともに横ナデ調整。	胎土：精良 色調：淡灰色 焼成：硬	13・14T 第3層
3	須恵器 壺	口径10.7cm	○掛け部は丸く作られ、天井部は厚手に作られた。	○内外面ともにクロロナデ調整	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	13・14T 第3層
4	須恵器 壺	口径12.3cm	○掛け部は断面三角形に作られ、天井部はほぼ平に作られている。	○内外面ともにはヘラ切り後ナデ調整。 天井部外面は	胎土：良好 色調：淡青灰色 焼成：硬	13・14T 第3層
5	須恵器 壺	口径12.7cm	○掛け部は小さいが断面三角形にしつかりと作られている。	○内外面ともにクロロナデ調整。	胎土：良好 色調：淡青灰色 焼成：硬	13・14T 第3層
6	須恵器 壺	口径 16cm	○掛け部はやや横に伸びた断面三角形をなし、天井部は内側に落ち込んでいる。	○内外面ともにクロロナデ調整。	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	13・14T 第3層
7	須恵器 壺	口径16.3cm	○掛け部は厚手で端部を弱く引き出しただけで作られる。	○内外面ともにクロロナデ調整	胎土：良好 色調：淡青灰色 焼成：硬	13・14T 第3層

番号	種類 器 形 法 量	形 態	調 整	胎土・色調・焼成	備 考
8	須恵器 蓋 坏	口径17.2cm ○掛け部は厚手で断面三脚形にしつかり、天井部は下ドーム状をなす。	○内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	15T 拡張 第3層
9	須恵器 蓋 坏	口径 18cm ○掛け部は端部を下方に強く引き出しあつかりと作られる。	○内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：良好 色調：灰色 焼成：硬	15T 第3層
10	須恵器 身 坏	口径12.7cm ○底部は不整なり平底で、体部はやや外傾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。	○体部は外面および底部内部ロクロナデ調整。 ○蓋部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	13・14T 第3層
11	須器器 身 坏	底部径10cm ○底部は平底で体部は外傾して立ち上がる。	○内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	20T 第3層
12	須恵器 身 坏	口径 14cm 高台径10cm 器高 4.1cm ○高台は断面台形にしつかり作られ、体部は外傾して立ち上がる。	○内外面ともにロクロナデ調整。 ○高台は張り付けと思われる。	胎土：良好 色調：黑色 焼成：硬	15T 拡張 第3層
13	須恵器 身 坏	口径15.5cm 高台径10cm 器高 5cm ○高台は断面四辺形をなし、体部は外傾しながら立ち上がる。	○内外面ともにロクロナデ調整。 ○高台は張り付け高台と思われる。	胎土：良好 色調：黑色 焼成：硬	13・14T 第3層
14	須恵器 身 坏	口径16.1cm 高台径10.8cm 器高 6.2cm ○高台は断面四辺形をなし、体部は外傾しながら立ち上がる。	○内外面ともにロクロナデ調整。 ○高台は張り付け高台。	胎土：良好 色調：黑色 焼成：硬	13・14T 第3層
15	須恵器 身 坏	高台径 9.7cm ○高台は断面台形をなし、体部は外傾して立ち上がる。 ○壺の高台の可能性もある。	○内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：白色 焼成：硬	20T 第3層
16	須恵器 身 坏	高台径10cm ○高台は断面四辺形をなし、体部は外傾して開く。	○内外面ともにロクロナデ調整。 ○高台は張り付け高台。	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	13・14T 第3層
17	須恵器 身 坏	高台径10.1cm ○高台は断面四辺形をなす。	○高台は張り付け高台。	胎土：精良 色調：青灰色 焼成：硬	13・14T 第3層

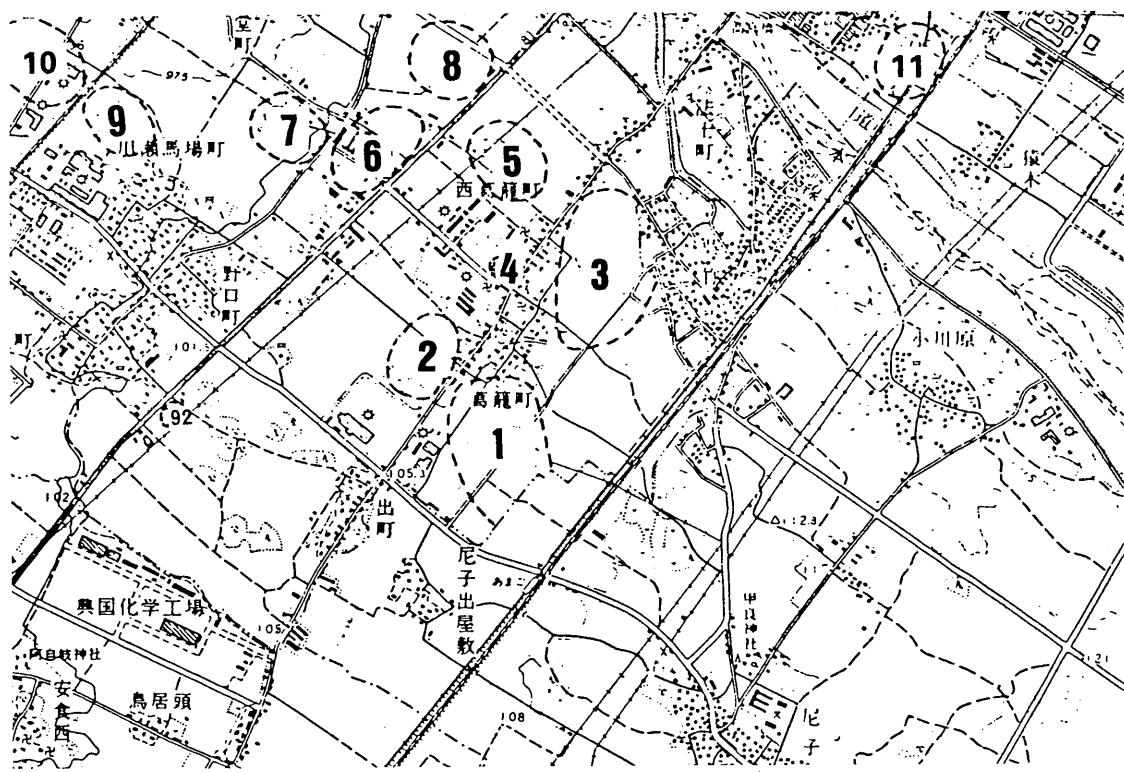
番号	種類 器 形	法 量	形 態	調 整	胎土・色調・焼成	備 考
18	須恵器 身 壺	高台径 9.8cm	○高台は断面四辺形のしつかりとしたものである。	○内外面クロロナデ調整。 ○高台は張り付けと思われる。	胎土：良好 色調：青灰色 焼成：硬	20T 第3層
19	灰釉陶器 壺	高台径10.7cm	○高台は断面台形のしつかりした作りで、 体部はやや外傾して立ち上がる。 ○肩部は強く張っている。	○体部は内外面ともに基本的にロクロナデ 調整であるが、中位部下部分の外面はヘ ラ削り調整。 ○高台は張り付け高台であり、底部外面は 不調整。	胎土：精良 色調：乳白色 焼成：硬	20T 第3層
20	灰釉陶器 壺	高台径 9.2cm	○高台は、断面台形のしつかりした作りで、 体部はやや内弯しながら立ち上がる。	○体部は内外面ともに基本的にロクロナデ 調整であるが、外面はヘラ削りをほどこす。 ○高台は張り付け高台である。	胎土：精良 色調：乳白色 焼成：硬	13・14T SD-2
21	灰釉陶器 台	高台径 9 cm	○高台は、外側に伸びた断面台形のしつか りした作りである。 ○壺の高台部分。	○高台は張り付け高台と考えられ、ロクロ ナデ調整である。	胎土：精良 色調：乳白色 焼成：硬	15T拡張 第3層
22	須恵器 壺	高台径 9.5cm	○高台は断面四辺形をなす。	○高台は、張り付け高台と考えられ、壺底 部外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整。	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	15T拡張 第3層
23	灰釉陶器 台	高台径 7.9cm	○高台は断面四辺形をなす。 ○碗の高台か。	○高台は張り付け高台で、ロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：乳白色 焼成：硬	13・14T 第3層
24	灰釉陶器 台	高台径 7.4cm	○高台は断面台形をなす。 ○碗の高台か。	○高台は張り付け高台で、ロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：乳白色 焼成：硬	13・14T 第3層
25	灰釉陶器 台	高台径 7.6cm	○高台は断面四辺形が下方に伸びる。 ○碗の高台。	○高台は張り付け高台で、ロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：乳白色 焼成：硬	13・14T 第3層
26	灰釉陶器 台	高台径 7.7cm	○高台は、断面三角形をなす。 ○碗の高台。	○高台は張り付け高台で、ロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：乳白色 焼成：硬	13・14T 第3層

番号	種類 器	形 量	形 態	調 整	胎土・色調・焼成 備 考
27	灰釉陶器 台 高	高台径 9.3cm	○高台は、四辺形で端部を丸くおさめる。 ○碗の高台か。	○高台は、張り付け高台でロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：乳 燒成：硬 15T 抜張 第3層
28	灰釉陶器 台 高	高台径 8.1cm	○高台は端部を丸くおさめた断面四辺形を なす。 ○碗の高台か。	○高台は、張り付け高台でロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：淡白 燒成：硬 15T 技張 第3層
29	灰釉陶器 台 高	高台径10.9cm	○高台は、断面三日月形をなす。 ○碗の高台か。	○高台は、張り付け高台でロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：淡白 燒成：硬 15T 第3層
30	灰釉陶器 台 高	高台径 7.3cm	○高台は断面三日月形をなす。 ○釉は塗り掛け。	○高台は、張り付け高台でロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：淡白 燒成：硬 33T 第3層
31	灰釉陶器 施	高台径 7.4cm	○高台は、断面台形をなす。 ○釉は塗り掛け。	○高台は、張り付け高台でロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：淡白 燒成：硬 13・14T 第3層
32	灰釉陶器 台 高	高台径 9.1cm	○高台は断面台形をなす。	○高台は、張り付け高台でロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：乳 燒成：硬 15T 技張 第3層
33	灰釉陶器 壺	口径 8.2cm	○長頸壺の口縁と考えられ、口縁部はしつ かりした断面三角形をなす。	○ロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：淡白 燒成：硬 15T 第3層
34	灰釉陶器 碗 小	口径 8.2cm	○体部は内湾して開き、口縁部をやや外反 させて端部を丸くおさめる。	○ロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：明灰色 燒成：硬 15T 技張 第3層
35	綠釉陶器 台 高	高台径 7.6cm	○高台は、内側に張った断面白台形をなす。 ○緑釉は全面にかかる。 ○碗の高台か。	○ロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：明灰色 燒成：硬 15T 技張 第3層
36	綠釉陶器 台 高	高台径 8.7cm	○高台は、蛇の目高台である。 ○緑釉は全面にかかる。 ○碗の高台か。	○ロクロナデ調整。 ○高台は、削り出し高台。	胎土：精良 色調：淡白 燒成：硬 15T 第3層

番号	種類 器形	法量	形態	調	整	胎土・色調・焼成	備考
37	土師器 甕	口径 16cm 口縁は「く」の字状に開き、端部を丸くおさめる。	○器表剥脱のため不明。	胎土: 良好 色調: 明赤褐色 焼成: 軟	15T 抜張 第3層		
38	土師器 台 高	高台径 9.4cm ○高台は断面四辺形でやや外側に張り出しあつたし作りである。	○ナデ調整と思われる。	胎土: 良好 色調: 暗灰色 焼成: やや軟	15T 抜張 第3層		
39	土師器 环	口径12.8cm 器高 2.3cm ○不整形な平底から体部は内弯ぎみに開き端部を丸くおさめる。	○ナデ調整と思われる。	胎土: やや良 色調: 黄褐色 焼成: 軟	15T 抜張 第3層		
40	土師器 坏	口径12.6cm 器高 2.7cm ○やや内側に凹んだ平底より体部は外傾して開き、端部を丸くおさゆる。	○ナデ調整と思われる。	胎土: 良好 色調: 黄褐色 焼成: 軟	15T 抜張 第3層		
41	土師器 坏	口径14.4cm ○不整形な平底より体部は内弯ぎみに開き、口縁部を外返させて端部を丸くおさめる。 ○口縁部内面に弱い凹線がある。	○ナデ調整と思われる。	胎土: 良好 色調: 赤褐色 焼成: やや硬	13・14T P-10		
42	土師器 皿	口径15.3cm ○ほぼ平に作られた平底より体部は外傾して開き、端部を丸くおさめる。	○ナデ調整と思われる。	胎土: 良好 色調: 赤褐色 焼成: やや硬	13・14T P-10		
43	須恵質 瓦	○表面は布目で、裏面は繩目のタタキ痕を残す。	○タタキ調整。	胎土: 良好 色調: 青灰色 焼成: 硬	4T 第3層		

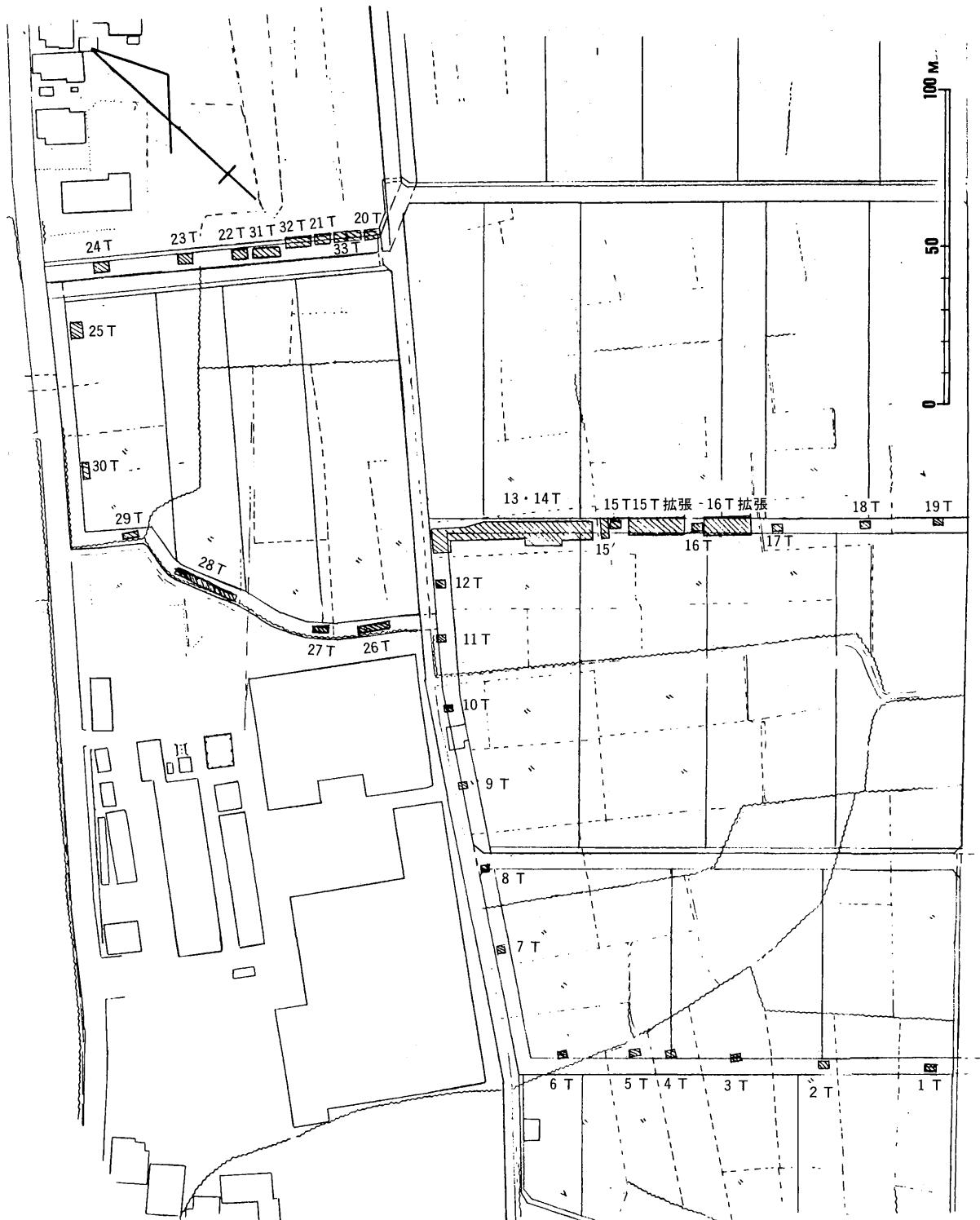
# 図版



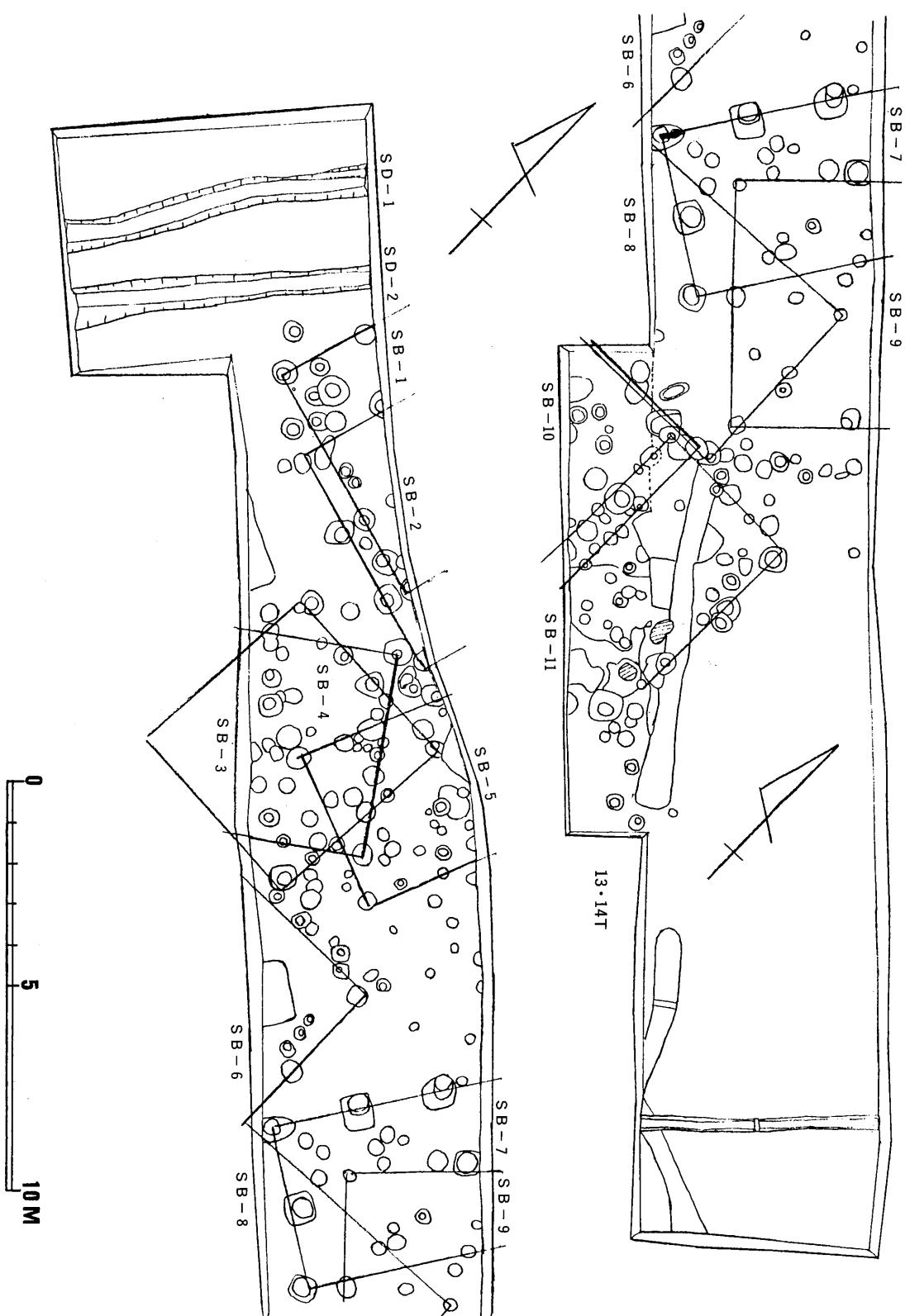


図版1 調査地点と周辺の遺跡

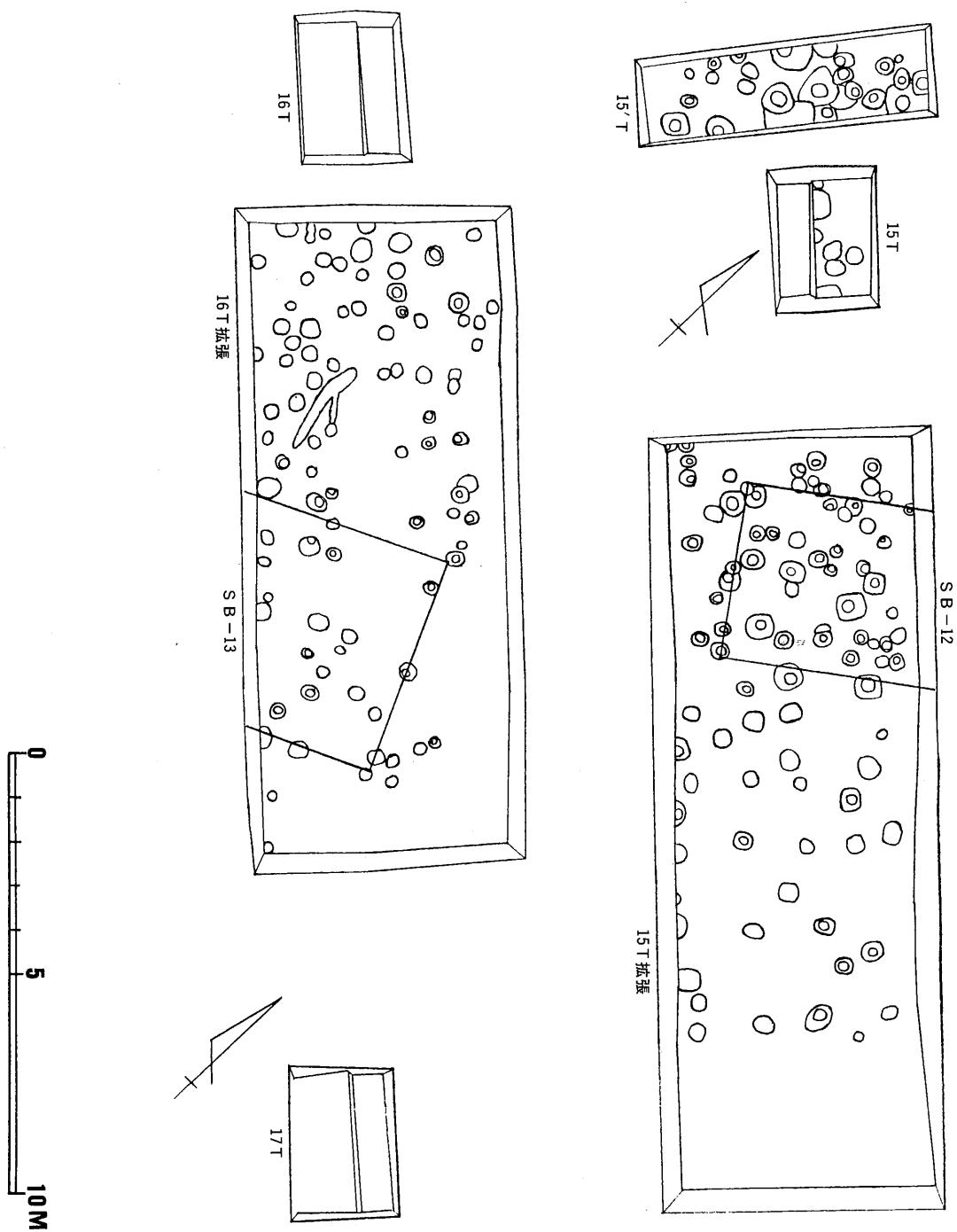
1	葛籠南遺跡（今回の調査遺跡）	2	南川瀬南遺跡
3	法士南遺跡	4	西葛籠遺跡
5	葛籠北遺跡	6	極樂寺遺跡
7	天田遺跡	8	段ノ東遺跡
9	西海道遺跡	10	杉田遺跡
11	カットリ遺跡		



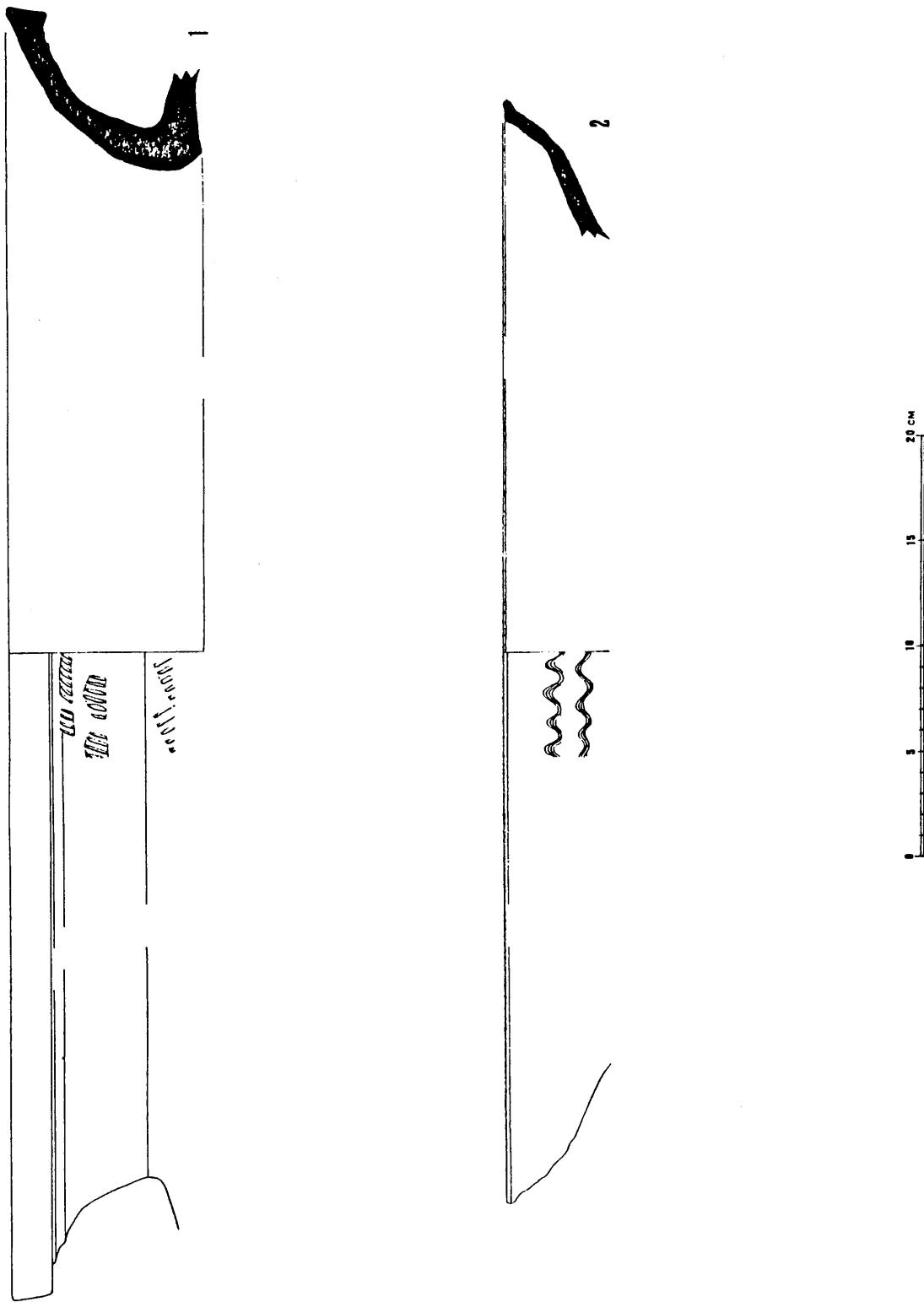
図版2 葛籠南遺跡トレンチ配置図



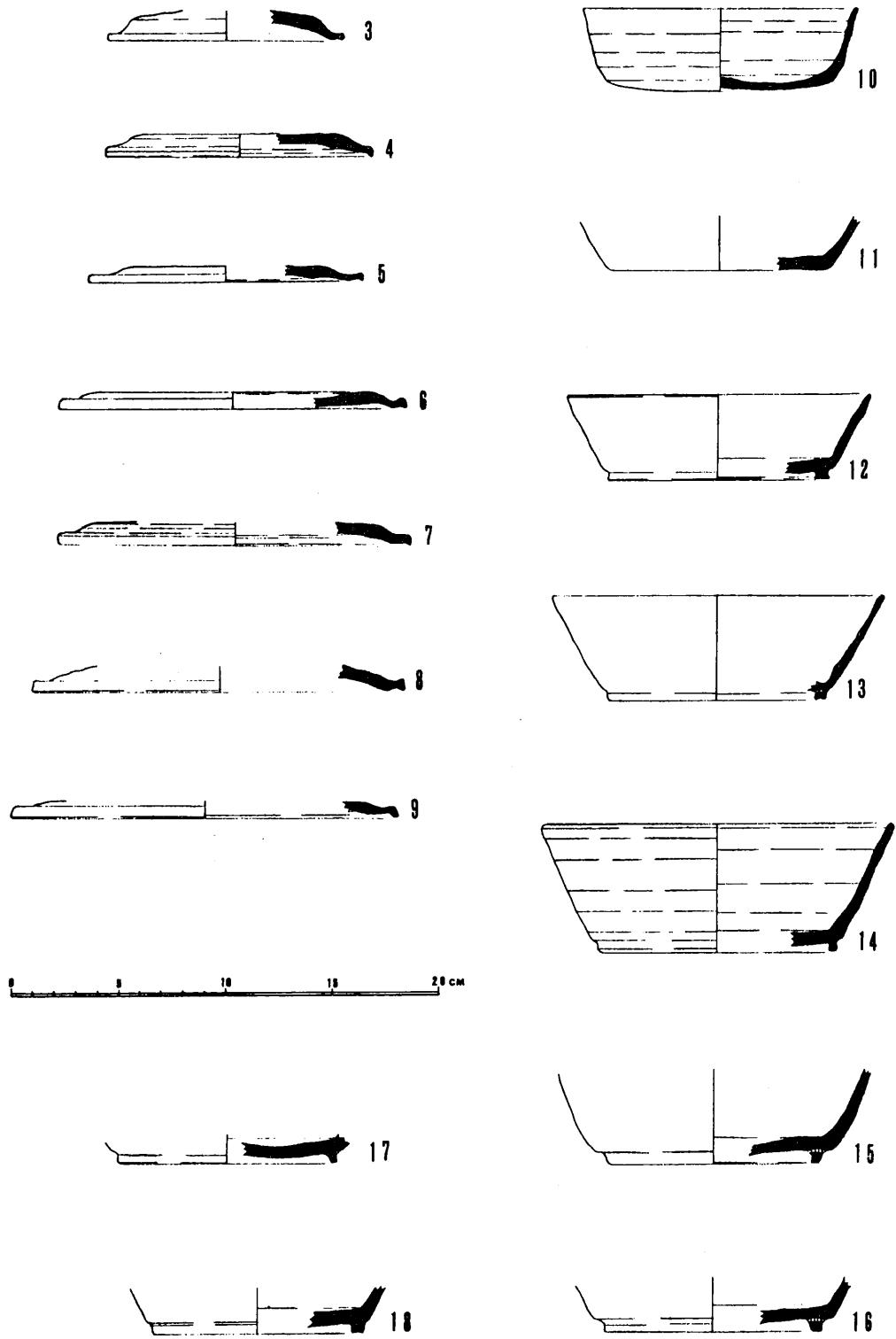
図版3 葛籠南遺跡13・14トレンチ遺構図



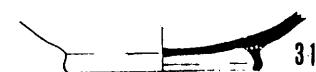
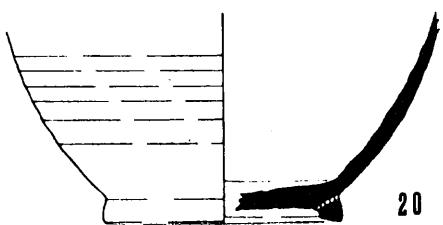
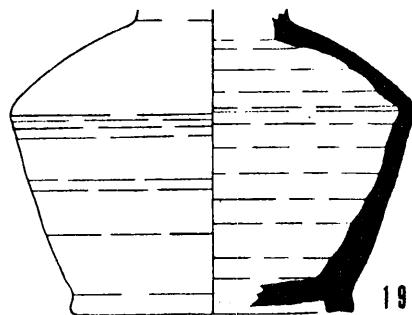
図版4 葛籠南遺跡15~17トレーナー構造図



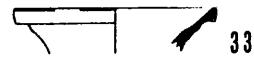
図版5 葛籠南遺跡出土遺物実測図



図版 6 葛籠南遺跡出土遺物実測図



図版7 葛籠南遺跡出土遺物実測図



33



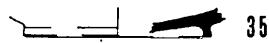
37



34



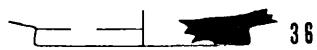
38



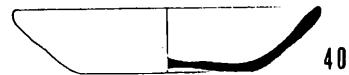
35



39



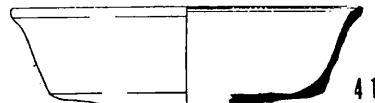
36



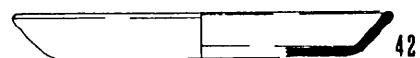
40



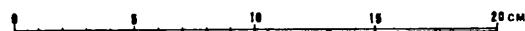
43



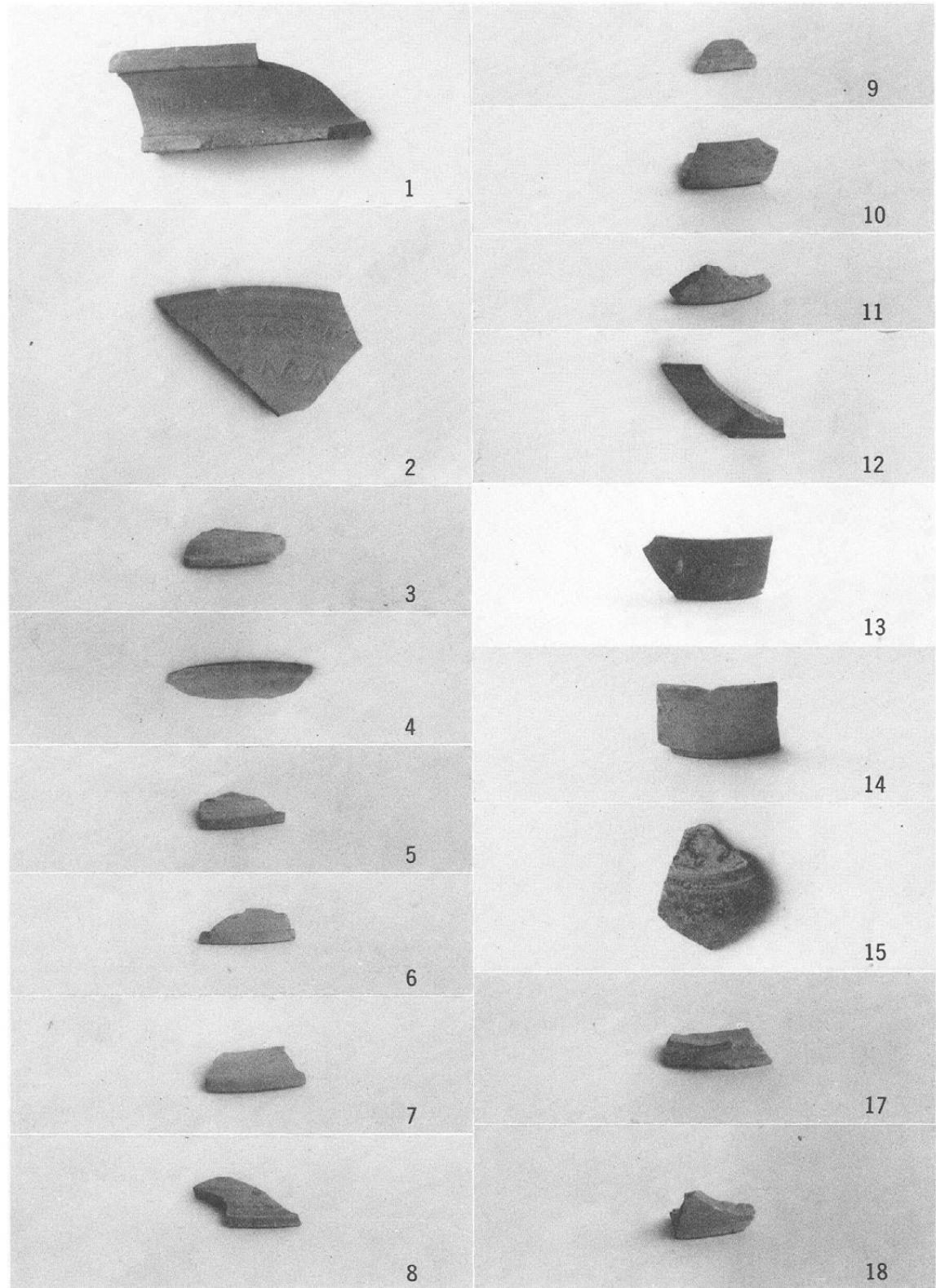
41



42

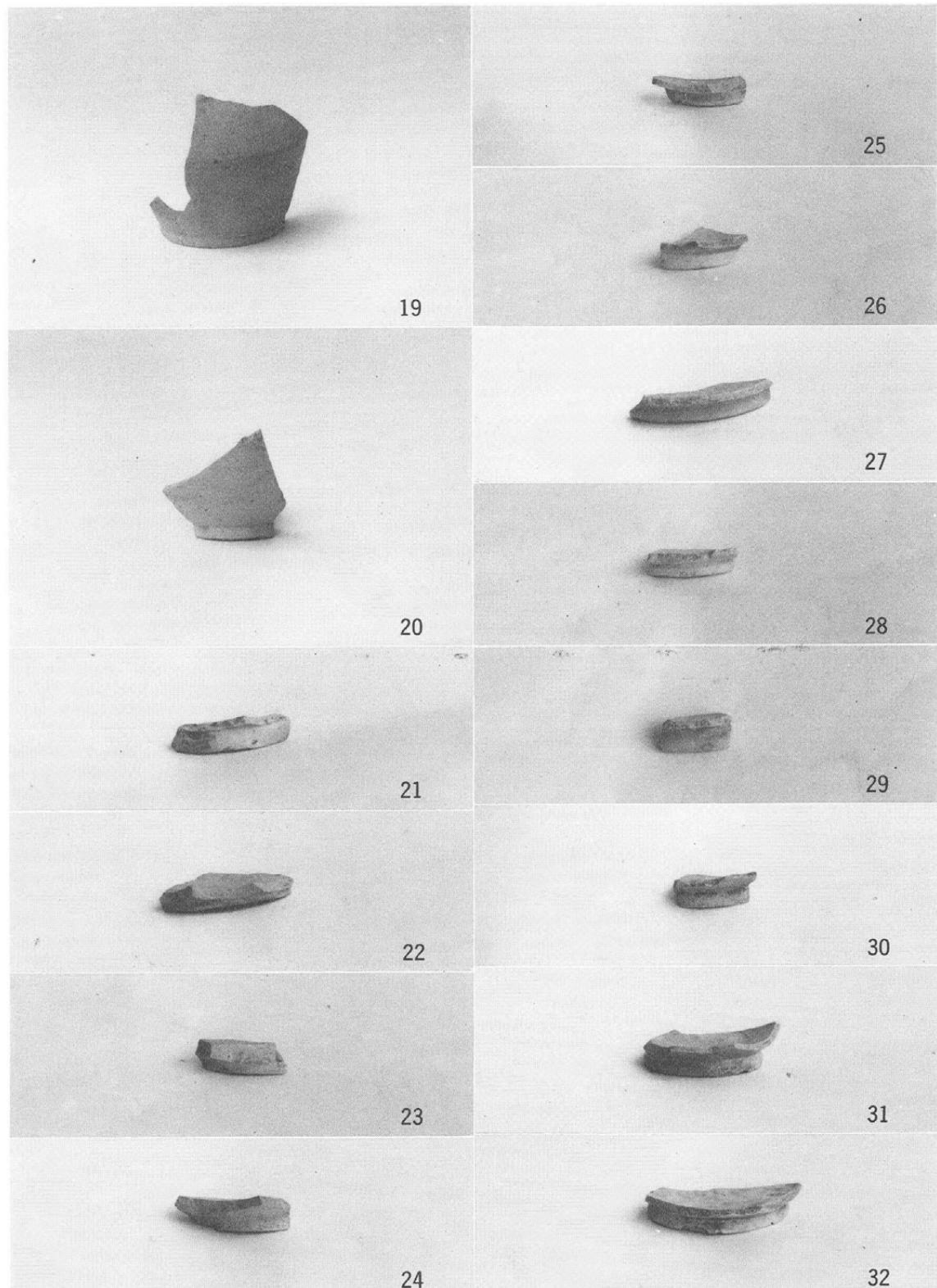


図版 8 葛籠南遺跡出土遺物実測図



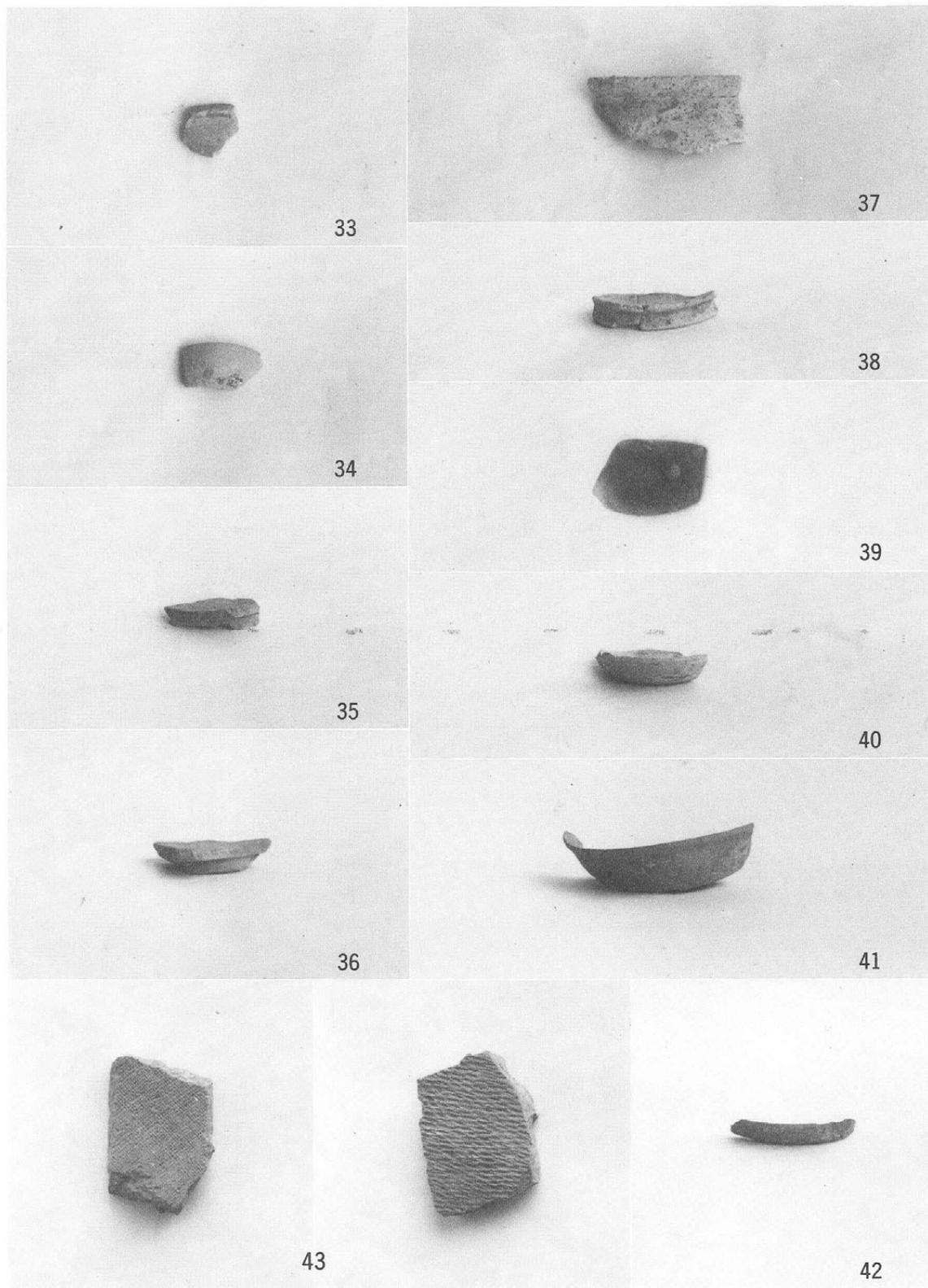
図版 9

葛籠南遺跡出土遺物写真



图版10

葛籠南遺跡出土遺物寫真



图版11

葛籠南遺跡出土遺物寫真



調査地近影（東側から）



調査地近影（南側から）

図版12



調査地近影（南から）



図版13

13・14T 遺構検出状況



13・14 T 遺構検出状況



図版14

13・14 T 遺構検出状況



13・14T掘り込み状況



図版15

13・14T掘り込み状況

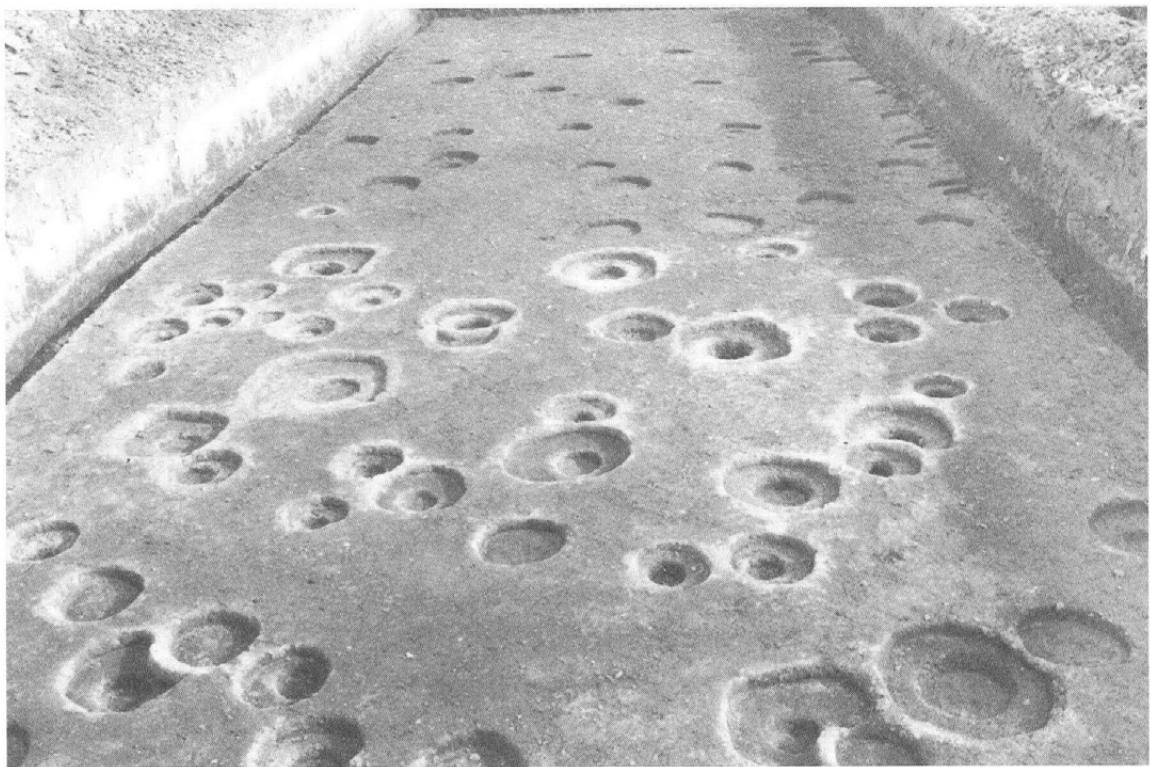


15' T 遺構検出状況



図版16

20~33 T 調査状況



15 T 拡張遺構掘り込み状況



図版17

15 T 拡張遺構掘り込み状況

彦根市埋蔵文化財調査報告第16集

葛籠北遺跡

1988

編集 彦根市教育委員会

発行 彦根市教育委員会

印刷 サンライズ印刷株式会社

卷之三

目次

卷之三